

7 海賊キッドの宝が眠る日本の宝島（鹿児島県）

日本の財宝伝説の中には、外国由来のものがいくつかある。とくに異彩を放ってるのが、四国の剣山にあるという古代イスラエルのソロモン王の宝と、鹿児島県の宝島に隠されていると伝えられる、海賊ウィリアム・キッドの宝だ。

ふつうに考えれば荒唐無稽すぎる話である。それなのに、この二つが国内でベスト二十か三十に入るほどの有名な財宝伝説になっているわけは、信ぴょう性は別にして、単に物語として面白いからだろう。畠山氏の本には、過去に探索者がいることが書かれているが、ぼくにはソロモン王の宝の根拠とされるものは、妄想とこじつけにしか思えなかったし、宝島は大学の探検部の学生が冒険心を満たしに行く場所としてはちよいどいいという程度で、どう考えてもぼくたちが探索の対象としてまじめに取り組む伝説ではないと、以前は完全にスルーしていた。

だから、二〇〇六年六月初旬、夏恒例の24時間テレビ「愛は地球を救う」（日本テレビ系列）で、宝島から海賊キッドの宝探しを生中継したいという相談が舞い込んとき、ぼくは頭を抱えてしまった。宝島が選ばれた理由は、局のプロデューサーが、学生時代に探検部に所属していて、島を訪れたことがあるからとのこと。

（それだけかい）

苦笑いするしかなかった。国民的チャリティー番組で、おおぜいの人に見てもらうためにやるのだし、アドバイスを求められたぼくには、トレジャーハンターとしてのプライドもある。選ぶ素材はもう少し可能性の高いものにすべきではないか。だが、すでに宝島からの生中継を前提として、準備が進んでいるという。

（視聴者にある程度の期待をもたせ、ワクワクしながら見てもらわなければならない。そのための材料がどれだけあるだろうか、どんな方法が考えられるだろうか）

考えぬいた末の一つの提案が、スタッフの努力もあって実を結び、劇的な展開を迎えるのだが、それを述べる前に、まずは宝島伝説の概要を説明しておこう。

そもそも、日本に宝島という名前の島が実在することを知っている人が、どれくらいいるだろうか。ある会合でぼくが出席者に質問してみたところ、十人のうち一人しか知らなかった。鹿児島県人の中にも知らない人がいるそうだから、超マイナーな島というしかない。

正式な地名は鹿児島県鹿児島郡十島村宝島。屋久島と奄美大島の間に約百六十キロにわたって連なるトカラ列島には、七つの有人島がある。北から口之島、中之島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小宝島、そして最も南に位置するのが宝島だ。面積七・一四平方キロ、周囲一三・七七キロの小さな島である。

名前の由来については諸説あつてはつきりしたことはわからないが、『日本書紀』にトカラ列島の名があり、トカラは宝島のタカラに由来するともいわれるので、千年以上前からそう呼ばれていたと考えられる。けっして海賊が宝物を隠したからその名がついたわけではない。

だから、十七世紀のイギリスの海賊ウィリアム・キッドが、ここに財宝を隠したといわれても、信じるほうがどうかしているのだ。できすぎた話というのを通り越して、これは

もうファンタジーでしかない。

それはともかくとして、キッドが実在した人物であるのはまぎれもない事実である。一六四五年にスコットランドに生まれたキッドは、アメリカのニューヨーク州に移住して貿易船の船長になった。妻方の資金をバックにどんどん商売を広げていったが、あるとき、当時横行していた海賊船を取り締まる役につく。

しかし、これは割に合わない仕事で、獲物を捕らえなければ乗組員に給料を払うこともできず、しだいに海賊船ではない船まで襲うようになった。なかでも、一六九八年一月にマダガスカル島沖で襲った、東インド会社の商船「クエダ・マーチャント号」は超大物で、一躍海賊としての名が轟きわたり、以後おたずね者となる。そして、翌年、ニューヨークに帰ったところを捕らえられ、一七〇一年五月、ロンドンで絞首刑に処せられた。

キッドが実際に海賊行為を働いた年月は、けっして長くはない。だから、「七つの海を荒らし回り、キッドが略奪行為を働いたところの近くの島には必ず財宝が隠されている」という伝説は、かなり誇張されたものであることは確か。それでも、彼の活動拠点に近かったニューヨークのロング・アイランド島の東端に浮かぶガーディナーズ島や、カナダのノバ・スコシア半島の東岸にあるオーク島では、隠されていた宝物が見つかったことがあり、未発見のものもあると考える人が、いまでも宝探しを目的に訪れるそうだ。エドガー・アラン・ポーの『黄金虫』は、隠されたキッドの宝を題材にしており、ロバート・スチーブンソンの『宝島』のモチーフになっていることもよく知られている。

では、キッドが日本までやって来た可能性があるのだろうか。捕らえられる直前の一年間ほど、東シナ海を中心に略奪行為を働いていたといううわさはあるが、アメリカやイギリスに残る史料には、はっきりとそのことを示すものはない。逆に、それを完全に否定する材料も見当たらない。

時代的にはずっと後のことだが、宝島に外国人がやってきた確かな記録はある。文政七年（一八二四）にイギリスの船が寄港しているのだ。島に上陸した乗組員が食用の牛を要求したところ、島民が拒んだために争いが起こり、牛三頭を強奪したイギリス人の一人を、たまたま島に来ていた薩摩藩の役人が鉄砲で射殺するという事件に発展。幕府が「異国船打払令」を出したのは翌年のことで、この事件がきっかけになったといわれる。当時はすでに、日本の周辺にロシアやイギリスをはじめ外国船がたびたび来航していた。

実のところ、宝島にキッドの宝が隠されているのではないかといううわさが日本国内に広まり、宝探しが始まったのは、それから百年以上たってからのことである。

戦前の昭和十二年（一九三七）二月四日のこと、「日本・東京・日本領事館」というへんな宛名書きをした手紙が、外務省に舞い込んだ。差出人の名はなく「米国探偵家秘密情報員より」とだけあり、アメリカ・コネティカット州サウシントン局の消印があった。内容は、

「海賊キャプテン・キッドが一七〇〇年ごろに描き残した地図は、日本の南西諸島のどこかの島と思われる。ここには、一億ドル以上の金貨・宝石類が隠されているので、日本政府で探されたいかが。もし成功したら応分の謝礼をいただく」

というもの。そして、前年秋発行の「MODERN MECHANIX」という雑誌に掲載された島の地図の複写が入っていた。

外務省の役人は取り合わなかったが、新聞記者がかぎつけ、翌日の各紙がこれを大々的

に報道した。新聞には、「宝島」という見出しはあるものの、それがトカラ列島の宝島であるとは書かれていない。単にスチーブンソンの名作『宝島』になぞらえただけ。それがいつしか実在する宝島と結びつけられて、うわさが次第に広まったのだろう。

では、財宝探しが始まったのはいつのころからか？ 島には、昭和十二、三年ごろ、外国人がやって来たという話が伝えられているという。島民にはまったく言葉がわからず、目的などいっさい不明だったそうだが、それが事実だとしたら、雑誌が発行された直後に、ことになるが、詳しいことはわからない。

また終戦の翌年に、アメリカ人が沖縄からヘリコプターでやって来たこともあるらしい。このときは通訳がいて、はつきりと海賊キッドの宝探しだということがわかったものの、手がかりも得られず、たった二日で諦めて帰って行ったという。

ぼくは、日本人が宝探しを目的としてさかんに島を訪ねるようになったのは、昭和四十八年以降のこととみる。というのは、畠山清行氏が『日本の埋蔵金』（上・下）を著したのが昭和四十八年のことだからだ。それ以前の著書もあるが、あまり広く読まれることはなかった。『日本の埋蔵金』は内容が詳細でポリウムもあり、全国のほとんどの図書館の蔵書となり、以後、埋蔵金マニアにとってバイブルとなった。図書館では盗まれることも多かったらしい。またこの本を参考にして、雑誌などに宝島のキッド伝説に関する記事がたびたび出るようになった。大学の探検部や個人の財宝伝説マニアが島を訪れるなど、ちょっとしたブームが起こったのはたぶんこれが契機と思われる。

ただし、昭和十二年に新聞に掲載された記事の間接的な情報程度では、本気で探索を行うための十分な根拠にはならない。したがって、島内に数カ所ある鍾乳洞が、それらしい雰囲気をもっているという理由だけで注目され、成果といえば日本の古銭が見つかったくらい。それも洞内の祠に供えたお賽銭である可能性が高く、直接キッドと結びつくものは何も得られなかった。

なお、畠山氏の本には、昭和十二年当時、新潟県三条市の小学校教員だった竹田信和と、教え子の根岸そで子、その夫でアメリカ人のロバート・ホワイトという人物が登場する。竹田のもとには先祖から伝えられた宝島の地図と外国金貨数十枚があり、新聞記事に驚いて探索を計画してはみたものの、いろいろな事情から実行できず、絵図の複写を手伝わせたそで子が、戦後結婚した相手のロバートに秘密を打ち明け、それを手がかりにロバートが占領下の宝島に行つて財宝を見つけたと書かれている。畠山氏に確かめる機会はどうとうなかったもので、これが実話かどうかは何ともいえない。終戦の翌年にアメリカ人が来島したという話と一致しないこともないが、何かが見つかったならば、その痕跡やうわさ話が残るそうだが、島にはそういうものはない。

モダン宝島探検
三億余の金銀財宝
海賊キャプテンキッドが埋めた
それが日本領土にある

アメリカの探偵家から
夢のやうな愉快な便り

夢のやうな愉快な便り
探偵家から夢のやうな愉快な便り

夢のやうな愉快な便り
探偵家から夢のやうな愉快な便り

ぼくが24時間テレビのスタッフに提案したのは、キッドが描き残したという地図を手に入れることである。日本の新聞の切り抜きは持っているが、地図は不鮮明すぎる。オリジナルでなくてもかまわない。古い話になるが、雑誌に載ったのだから、そのコピーでもいい。

すぐに、雑誌に掲載されたキツドの遺品に関する記事のコピーが送られてきた。とびらのページに載っている地図を見たときの第一印象は、（ああ、ディテールまで描かれている）という程度。島全体の形は実際の宝島がきれいなハート型をしているのに対し、キツドの地図はいびつで細長い。また、南北に細長く山地が走り、南の方が半島状に伸びている点が一致していることに気づいたが、その程度のこと取るに足りない。

しかし、次の瞬間、ぼくの体に電流が走った。視線が島の東部に向いたときだ。正確に順を追って述べると、キッドの地図を見たあとに、現在の宝島の観光地図を広げて見比べたとき、あまりのことに声を上げそうになった。キッドの地図では海岸線が大きくふくらみ、そこに「Corall Bancks」という文字が見える。スペルミスなのか、あるいは彼の母国語であるスコットランド語の表記なのかわからぬが、「Coral Banks」のいさだらう。そしてその下には「nec passage」とある。同様に解釈すれば「nec」は「knee」で、膝くらいまで水に浸かりながら歩くことができる浅い海という意味にちがいない。

いっぽう、現在の宝島の地図の同じ場所は「珊瑚礁リーフ地帯」と表記され、「東側海岸一帯は白い砂浜が広がります」という注釈が

MAPS SPUR CAPTAIN KIDD TREASURE HUNT

November 1967

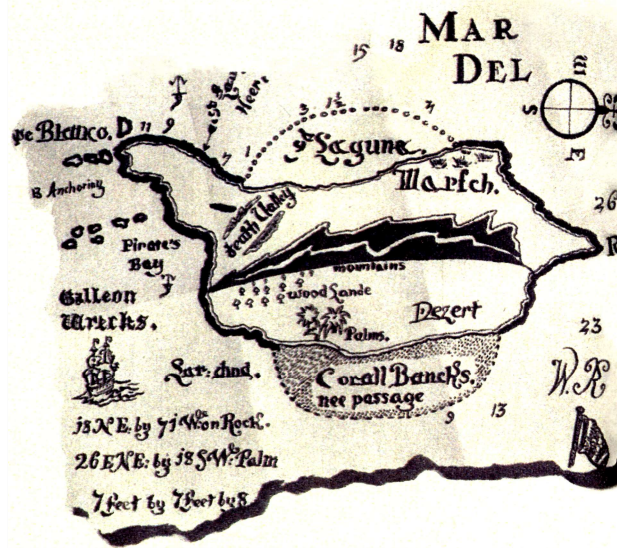
MODERN MECHANIX

HOBBIES AND INVENTIONS

now 15¢

GOLD DETECTOR
SEE PAGE 44

BEGINNING—PLANS FOR
MODEL HOMES
You Can
Afford



2006 年当時の宝島観光地図

ついている。そしてその内陸部には「元砂丘（砂丘造林地帯）」とあり、「今は草がしげってわかりにくいです」と説明されている。キッドの地図の同じ部分を見ると、まさしく「Dezet」とある。さらに、砂漠（砂丘）の南端に「Palms」と記された部分とピタリ一致する観光地図の箇所には「ビロウの群生地」と印刷されている。ビロウは島を代表するヤシ科の植物だ。

また、西側の海岸にはキッドの地図では大きくふくらんだ点線が描かれ、中央に「Lagune」という文字がある。これは「Lagoon」の意味で、東海岸ほど顕著ではないが、実際と同じく発達した珊瑚礁に囲まれた地形を表しているようだ。

二枚の地図をかわるがわる何度見つめただろうか。ときどき目を閉じてはまた机の上に視線を戻した。見まちがい、錯覚、自らの感覚を疑ってみたが、否定的な材料のほうが少ない。もはや偶然という言葉では片付けられなくなってきた。キッドが残したのはやはり日本の、鹿児島県の、トカラ列島・宝島の地図ではないだろうか。

こうなったらひとりで盛り上がっていてもしょうがない。すでに現地にはスタッフ数人が先行して入っている。早くこの分析結果を伝えなければならぬ。その前にもう一度、地図の周りと、それ以外に雑誌に書かれている彼の覚え書きの内容を見直し、ポイントを整理した。

地図のタイトルと思われる「MAR DEL」については、結局わからずじまいだった。「MAR」は「Marine（海）」の略ではないかという程度。だが、左下にある三行の文字については、これまでの経験もあり、何を意味するか解釈には絶対の自信をもつことができた。

「18NE by 71W: on Rock.

26ENE: by 18SW: Palm

7feet by 7feet by 8]

日本の埋蔵金秘文といわれるものにも、似たような表記がある。つまりこれは財宝の隠し場所を示す記号なのだ。第三章で紹介した「成島家埋蔵秘文書」には「十二 八十一 九十」という数字や「申酉亥の庫」という語句が出てくる。埋蔵ポイントを示すには、基点と方角、距離の三つが必要で、「成島家埋蔵秘文書」では方角と距離はわかったものの、結局基点がわからずじまいだった。

ところが、嬉しいことに、キッドの地図には三つとも揃っている。すなわち、「岩から北東へ18 西へ71 ヤシの木から東北東へ26 南西へ18」宝庫が二カ所あるのか、あるいは最初に岩から進んで第二の基点のヤシの木へ到達し、そこから辿ったところが最終地点では。現地へ行けば判断がつくだろう。

数字の単位はフィートと考えるべき。なぜなら、三行目に feet の表記があるからだ。これは宝庫のサイズ、つまり七フィート（約二・一メートル）×七フィート×八フィート（約二・四メートル）とみてまちがいない

それから、念のために、宝島の北にある小宝島と南の横当島、沖縄県の石垣島、宮古島の近くの大神島の形を調べた。キッドの財宝の埋蔵地には異説があり、その四島が候補といわれていたからだ。予想どおり、どの島にもキッドの地図との共通点はなかった。

もうひとつ、決定的とも思われる事実が、ある作家のルポルタージュの中に見つかった。宝島には次のような言い伝えがあるというのだ。

「元禄十一年のころに外国の海賊がやって来て、洞窟に逃げ込んだ島民を焼き殺し、その

洞窟に住み着いていたが、あるとき、財宝を残したまま島をあとにした」

元禄十一年というのは西暦でいうと一六九八年で、キッドが捕まる前年。足跡をたどることのできない空白の時期とぴたり一致する。

頭の中の整理がつくと、ぼくは現地入りしているスタッフの一人、Iさんに電話をかけ、一つ一つていねいに説明した。彼女はぼくの話の復唱することで、ほかのスタッフにも同時に内容が理解できるように考慮してくれた。そのおかげで、彼らがしだいに気持ちを高ぶらせる様子が伝わってくる。最後に、財宝が納められた宝庫のサイズを知らせたところで、興奮は最高潮に達し、悲鳴に似た声が上がった。この時点で彼らは、半分以上財宝を手にしたつもりになったようだ。ぼくはできるだけ気持ちを抑えるように促すとともに、自信をもってロケハンの仕事を続けてほしいと結んだ。

翌日、さらにヒートアップしたIさんから電話がかかってきた。

「八重野さんの読み通りです。キッドたちの上陸地点がわかりました！」

実は、地形の共通点の説明以外に、ぼくは彼らに一つ課題を与えていた。地図上の南部の半島状の部分に矢印が書き込まれていて、「Heer (Here の意か)」ははっきりと読み取れるが、すぐの上の消えかかった文字が「Land」と読めなくはないので、矢印が示す場所には何かがあるか調べてほしいと頼んでいたのだ。Iさんのうわずった声がぼくの耳に届いた。

「海岸の岩場にちょっとした切れ目があるところで、昔、船着き場に使っていたそうです。

戦後、ヤミ物資の取り引きのときに、ここだと目立ちにくいから利用していたと、島の古老から聞き出しました。まちがいなく、ここがキッドの上陸地点です！」

それを聞いて、ぼく自身がいてもたってもいられなくなかった。

(現地へ行けば、もっといろいろなことがわかるはずだ！)

早くもそれから一週間後、ぼくの希望はかなえられた。

鹿児島港を午後十一時に発つ定期船「フェリーとしま」(一三八九トン)は、十三時間かけて宝島に到着する。寝ている間におよそ二百キロを南下して、早朝の午前五時過ぎに十島村の玄関口に当たる口之島の港に入港、それから五つの島を順番に回り、最後に入港するのが宝島の前まえごもり籠漁港だ(現在は奄美大島の名瀬港まで延長されている)。週に二便、海が荒れるとすぐに欠航するから、何週間も島に閉じ込められることがあると、以前訪島した友人から聞いたことがあった。

六月下旬、制作会社のチーフ・ディレクターのSさんはじめ、男性ディレクター三名、女性AD三名とともに、ぼくは初めて宝島の土を踏んだ。すでに梅雨が明けていたようだ。強い陽光が肌を刺す。透明度の高い海、亜熱帯性の深い緑、島の美しさは想像していたとおりだった。当時の人口は約百二十名。島の北部にあるひとかたまりの集

東側から見た宝島の全景



落で暮らしていた。ぼくはちょうどいい規模のコミュニティではないかと感じた。理由は次のようなことがあったからだ。

港で、若い女性に抱かれた最年少の女の子を見かけた。年齢は一歳半。毎日必ず一度は会っていたが、そのつど抱いている女性がちがっていた。

(どういうこと?)

四日後に確かめるまで、どの人が母親なのかわからなかった。ここではごく自然に、地域全体で幼子を大事に育てていたのだ。

小学校と中学校は併設で、児童・生徒は全部で十人にも満たなかった。当然、島のみならず子どもたちの名前と顔を知っていて、かわいがっている。子どもたちもまた、すべての大人たちを家族のように思っている。近隣との付き合いを煩わしく思う人たちは、この島には住めないと思うが、ぼくはこういう暮らしの中にこそ、ほんとうの幸せがあると感じた。

島には留学生もいた。福岡市からやってきたかわいらしい小学三年生の男の子で、ぼくたちが泊まった民宿に下宿し、小中学校に通っていた。民宿の奥さんが母親代わりになって、厳しく優しく身の回りの世話をしているのを見ると、自然に顔がほころんできた。ちょうど男の子のおばあちゃんが様子をみに訪ねてきていたところで、聞きもしないのに事情を語ってくれた。

「この子は気が弱くて、地元の学校ではうまくいかんだったとですよ。四月からこっちへ来て三ヵ月、ずいぶん明るく元気になって安心しました」

よほど嬉しかったのだろう、満面に笑みを浮かべていた。

民宿のご主人は郵便局長をしていた。ぼくと同じ歳だからもうすぐ定年のはずだ。客のサロンも兼ねている居間の壁には作り付けの棚があつて、芋焼酎の一升瓶が二十本くらい並んでいた。ほとんどがもらい物だそうで、「森伊蔵」や「魔王」などレアものもある。ご主人はこれには手をつけず、ふだんはダレヤメ(晩酌)焼酎の代表格「島美人」を愛飲していて、ぼくたちも最初はそれにならっていたが、棚のストック品が気になりだして、たまたまご主人の誕生日がやってきた日に、「ここはやっぱり飲むしかないでしょう」などとあおって、結局、「魔王」と「伊佐美」を一本ずつ飲み干してしまった。

そんな民宿ライフを送りながら、ぼくたちは怠りなく調査を進めていった。地元で借りた軽トラ二台を使って、スタッフとともに島中を走り回った。木立の中では、ときどきアカシヨウビンが羽音を立てて頭上をかすめていく。

一日目は注目すべき島の南部へ。最南端の荒木崎には白い灯台が建ち、バックには群青色の海。牧草地の緑と、隆起サンゴ礁が露出した茶色の岩山とのコントラストが美しい、一幅の絵のような風景が広がっていた。牧草地には黒毛和牛が数頭放し飼いにされていた。畜産業は島の産業の一つ。ほかに伊勢エビ漁に代表される漁業と、小規模ながら製塩業がある。畑の作物はほとんどが島内で消費されるが、小粒の島落花生は加工され土産物として売られていた。また、当時は観葉植物のサンスベリア(トラノオ)が人気を集めていて、現金収入になるというので、各家庭で盛んに栽培されていた。

強烈な日差しを浴びながら三日間歩き回った結果、手応えは確信に近いものに変わっていった。キッドの地図にある矢印の箇所は、先発隊の案内で確認することができたが、聞いていたとおり、海岸の平らな岩場の一部が人為的に削られ、小舟がつけられるようにな

っている。キッドの船がある程度の大きさの帆船だったとしたら、沖に碇を下ろして、ボートでここまで辿り着いたのだろう。

ぼくはそこから陸のほうを眺めて、あることに気がついた。岬寄りの牧場のど真ん中に、海上からでもよく見えそうな大きな岩山がある。当然、キッドたちの目にも入ったはずだ。海岸から牧場へ戻ると、ぼくは岩山に登ってみたいとスタップに伝えた。

思ったとおり、そこは実に見晴らしのいい場所だった。島の南半分をほぼ視野に収めることができる。ふと、百獣の王ライオンが、ほかの動物たちに向かって咆哮する場面が目に見えた。それにびったりのステージだ。

例のアメリカの雑誌には、地図のほかにキッドが書き残した覚え書き風のメモがあったと書いてあり、財宝の埋蔵地につながると思われるキーワードがいくつか載っていた。

「death Valley」「a range of hills」「triangles」「stakes in a lake」などだ。ぼくはそれを思い出しながら、眼前の風景をじっと眺めた。

そのうちにまず、「a range of hills」が意味するのは、たったいま歩いてきた、うねうねと起伏の多いこの土地のことだと思い当たった。彼らは上陸すると丘に登り、岩の上に立ってあたりを見渡し、財宝を隠すのに適した場所を探したのではないだろうか。

そしてぼくは、岩に登る前から気になっていた、西側の海岸に三つ並んだ奇岩を見つめた。一つは海岸から二百メートルほど離れた海中から突き出っていて、高さは二十メートルほど。舞立（むうたち）という名がつけられていて、地図にもそう記されている。手前の海岸にそびえるのが二双（ふたまた）とすったち。いずれも十五〜二十メートルの高さがあり、二双だけは風化して先端が角張っているが、かつてはあとの二つと同様、三角定規のようにとがっていたと想像される。なぜここだけにこんなものが残ったか、不思議といえば不思議だが、トカラ列島を含む南西諸島は台風の通り道。毎年必ず大型の台風がやってくる。大地の硬い部分が残し、大波に洗われ、激しい風雨にさらされ、長い時を経てこのような形になったのだ。

ぼくは三つ目のキーワードの意味がわかったような気がした。これこそが「triangles」にちがいない。遠くからでも目立つ三つの三角岩を、キッドは再びこの島にやってくるための目印にするため、メモに残したのだ。彼は略奪品をとりあえず最寄りの島に隠す習慣があったという。ほとぼりがさめたころに回収するつもりだったが、捕まってしまったためにそれができず、地図と覚え書きだけが残された。そういうことだろう。

さらにぼくは、三角形の岩の役目がそれだけではないような気がした。キッドがこの岩山に登ったとしたら、それぞれが数百メートル離れて存在する三角岩が、至近の距離にかたまって見えることに着目し、さらに、いまのぼくと同じように、眼下に広がる丘の中ほどにある、もう一つのこんもりとした岩に視

島南部の牧草地にそびえる岩山から、西側の海岸に並ぶ三角形の奇岩を見る。



線を這わせたはず。そして、そこに立って見た三つの三角岩の並びを想像できたとしたら。

「そうだ、あそこへ行ってみよう」

言うより早く体が動く。勢い余って上半身が先に落ち始め、一瞬、水平線が垂直に見えた。

「危ない！」

誰かが手を差しのべてくれた。かろうじて片手がそれに届き、三メートルの落下は免れた。ゆっくりと地上に降りて、ふうっと大きく息をつく。助けてくれたスタッフに礼を言い、すぐに前方の岩を目指した。

その岩は高さ二メートル、周囲十メートル弱で、この辺ではテーチ木というが、大島紬の泥染めの材料になる植物、シャリンバイが生い茂っていた。肉厚の葉がびっしりついたその枝を手がかりに、登るのは簡単だった。「やっぱり！」

思わず声が出た。三つの三角岩が横に等間隔に並び、それぞれの先端がほぼ同じ高さに揃っている。あまりの美しさに、スタッフのみんなが口をあんどぐりあけていた。

「彼らも見たんだろうね、この景色を。だとしたら、もうわかるよね。いま立っているこの岩が何の意味をもつか」

全員が大きくうなずいた。そう、宝庫へ辿り着くための最初の基点「Rock」がこれだ！（じゃあ「Palm」は？）

誰もが先を知りたがっていた。そこで、暗号の数字の単位を仮に「Foot」と考え、その通りに辿ってみることにした。岩の上にぼくが立ち、コンパスを持ってまず北東に向かって腕を伸ばす。ディレクターのB氏がその方向に「一、二」と声を出しながら歩き出す。一フットは約三十センチ。正確ではないが、半歩を目安として十八歩歩いた

次にぼくがその場所に行き、真西に向かって腕を伸ばす。B氏は長く伸びた雑草に足をとられながらも、六十数歩進んだ。

「うわっ、崖です。これ以上は進めません」

大声を上げたB氏の背後に、葉を大きく広げるひととき目立つ木があった。ビロウだ。「あるじゃない、Palmが、第二の基点が！」

切り立った崖の上端からのぞき込むと、その木の高さは二十メートル以上はあるように見えた。あとで島の古老から聞いたのだが、ビロウの寿命は、だいたい三百年くらいとか。だから、この木がキッドが来たところから目印になるほど大きかったはずはないが、古木が枯れると同じところから若い木が生えてくるそうで、きっと世代交代しているのだろう。

その日は夕暮れが迫っていたこともあり、南部の調査はそこまで。翌日は見落としていることはないか、島民の協力も頼んで、島の隅々まで見て回ることにした。まだ「Death Valley」に該当する場所の見当がついていない。

基点の“Rock”から“Triangles”を望む。また、目の前の崖から“Palm”が葉を広げている。



二日目の午前中、これまで何度か財宝の探索が行われたという、島の北西部にある鍾乳洞を見に行った。入り口は広く、奥へ行くほど狭くなっていった。規模は小さい。財宝を隠すような場所も見当たらないし、地図や覚え書きとの一致点もない。女性A DのIさんの動きがぎこちないので、どうしたことかと尋ねると、

「前回来たときにハブがいたんですよ。気づかずにカメラを回していたら数十センチのところに迫っていて。もう、びっくり！」

沖繩本島や奄美にいるような毒性の強い大型のハブではなく、トカラハブという小型のヘビだが、やはり毒をもっていて、噛まれるとそれなりに人体にダメージを与える。後日、三回目の訪島るとき、一週間前に畑でハブに噛まれたという青年に会ったが、腕を丸太ん棒のように腫らしていた。あと一週間くらいはその状態が続くと聞いた。

漁船で島の周りを一周して、遠くから観察をした。やはり、三つの三角岩は西側からよく見えた。もしかしたらこれが「stakes in a lake」かもしれない。そのまま日本語にすれば「湖の中の杭」だが、ここには湖といえるような場所はない。だが、三つの岩は満潮時には水中から突き出た杭のように見える。そこで、そのように表現したのではないだろうか。たとえば、キッドが暮らしたスコットランドかアメリカ・ニューヨーク州のどこかに、それに似たような印象的な場所があり、キッドの生活史の中の一つの原風景として、脳裏に焼きついていたのかもしれない。

苦労したのは「Death Valley」のほうだ。どこにもそう表現できそうな場所はない。船着き場跡から近いところに一本の沢があるので、調べてみることにした。国土地理院の地図では、沢らしいものはここ以外にはない。深くはないが、沢は谷を形成している。

沢沿いに夏草が生い茂っていたが、あるのかわからないような流れに沿って道らしきものがついていた。海岸から島を一周する舗装道路まで三百メートルほど歩いてみたが、ここを「死の谷」と呼ぶのはあまりにも大げさすぎる。ハブも見したが、体長二メートル以上の大蛇ならともかく、一メートルにも満たない小物だから、さほど怖くはない。

いろいろな可能性を考えてみた。もしかしたらキッドたちはこの沢で水を汲んだかもしれない。航海中、島に寄れば必ず水を調達したはず。その際に冗談半分だった「Death Valley」という名をつけたか、あるいは、沢が海に注ぐ河口近くの海岸には、隆起したサンゴ礁の間から熔岩が噴き出したあとがあるので、三百年前くらいまでは火山性のガスが噴き出していて、この付近がその名にふさわしい景観をもっていたのかもしれない。

「24時間テレビ」のワンパートとして、宝探しの生中継をやるだけの材料は揃った。プロデューサーもディレクターも、自信を深めている。そこで四日目の夕刻、集会場があるコミュニティセンターで、説明会を開くことにした。小中学生も含めて、島民の多くが集まってくれた。ぼくが説明役を務め、これまでに調べてきたこと、わかったことを、できるだけいいねいに伝えた。

島の人たちも、キッドの地図を見るのは初めてのようだった。そして、それが自分たちの住む島に酷似していることに驚いていた。これまで来島した探検家や財宝伝説マニアには、

（海賊の財宝の話は単なるおとぎ話さ。そんなもの、あるはずがないよ）

と、冷ややかな目を向けていたにちがいない。それが一変した。俄然みんな本気になっ

た。そして、八月末の本番の際には、青年団、婦人会、小中学校などが総力を挙げて協力してくれることになった。

（これこれ、こういう宝探しをやったかったんだ）

いまさらのように、ぼくの胸に熱いものがこみ上げてきた。過去に日本各地にいた探索者たちは、せっかく財宝のありかを突き止めたと思っても、発掘を諦めざるを得ないことが多かった。その理由の第一は、掘りたい場所の地権者が許可してくれないからだ。いきなり、

「お宅の庭先には時価数十億の財宝が眠っている。見つかったら半分はあなたにあげるから掘らせてくれ」

などと話を持ちかけても、断られるに決まっている。ふつうの人から見れば怪しすぎるのだ。中には迷惑料として数百万円を支払ってまで、ムリヤリ掘る人もいたが、どう考えても健全なことではない。地権者も発掘することの意味を理解して、同じ夢を見ながらことの成り行きを見守る。できればみんな協力し合って作業を行う。それが、ぼくが目指していた理想の形で、この宝島ではそれができそうだし、今回の「24時間テレビ」のテーマである「絆々今、私たちにできること」にぴったりだと思った。

八月上旬、二回目のロケハンには、日本トレジャーハンティング・クラブの仲間で、滋賀県の大津市で金属探知機などの通販会社を営む肘岡則幸氏が加わった。日本に数台しかないというドイツ製の高性能探知機を持ってきてくれたので、計測の際に多少の誤差があっても、最終ポイントはずっと探り当てることができると確信した。

もうこの時点では、狙いを牧草地だけに絞っていた。鍾乳洞など、島内のほかの場所の可能性はない。そこで二日目、五十メートルのメジャーを使って Rock から正確に北東に十八フィート辿り、そこから真西に七十一フィート進んで、ビロウの太木が第二の基点であることを確認すると、次にそこから東北東に二十六フィート、南西に十八辿った。そこは、前回おおよその見当をつけていた場所で、丈の短い笹がびっしりと生え、一抱えほどの白っぽいサンゴの岩がゴロゴロしていた。空洞も検知できるという探知機を一带にかけると、かすかな反応があった。サンゴの岩盤をくりぬいて宝庫をつくり、そこから出た岩を地表に転がしたのかもしれない。掘るのはここ。そう決まった。

二回目のロケには本番でも説明役を務めるタレントの石塚英彦氏が、巨体を揺すってやってきた。鹿児島からヘリで飛んできて、ヘリは三角岩を中心に島の空撮を行い、その日のうちに帰っていった。石塚氏も日帰りだったが、ポイントを押さえ、自分の役どころはきちんと把握しようだった。

そして八月二十三日の夜、ぼくは「フェリーとしま」で三たび宝島へ向かった。翌日に五十九歳の誕生日を迎えるので、船上でスタッフが祝ってくれた。現地ではもっと盛大な「キッドの財宝発見祝賀会」をやりたいものだ。民宿には祝い酒がしこたまある。

本番は二十七日の日曜日。それまで三日かけて

笹とサンゴの岩に覆われた場所に空洞反応が



最後の準備を行うのだが、技術スタッフの活躍には目を見張った。一便前のフェリーで鹿児島から中継車が運ばれていて、中継基地となる別の民宿と発掘現場を結ぶ約二キロの間に、すでにケーブルが何本も引かれていた。そして中継基地の前には巨大なパラボラアンテナが東京の方を向いて置かれていた。以前、群馬の山中から徳川の埋蔵金の発掘生中継をやったことがあったが、スタッフの人数は少ないものの、機材の仕込みのスケールはそれに匹敵していた。

二十五日には、石塚英彦氏とともにタレントの安めぐみさんが、羽田から飛行機で奄美大島へ飛び、チャーターした漁船で宝島へやってきた。定期航路以外のアクセスはそれしかない。民宿が俄然賑やかになった。安さんもこれまでの調査の経緯を聞いていたようで、期待に目を輝かせている。島民も含めて、この番組に参加するものすべての心が一つなっていると感じた。

そして当日がやってきた。

暗いうちから起き出し、午前五時四十分過ぎ、東の空がやっと明るみはじめたころ、ぼくは石塚さん、安さんと並んで牧場の一角に据えられたテレビカメラの前に立った。そして、総合司会・徳光和夫さんの、日本武道館からの呼びかけに応じて、「宝を必ず掘り当てます!」と、決意表明した。

ふだんは静かな牧場に、草刈り機のエンジン音が響く。まずは、現場一帯に生える雑草や笹を刈り取り、発掘ポイントのサンゴの岩を重機で取り除いた。地面がならされ、動きやすくなったところで地中レーダーをかけ、地下の様子を探る。残念ながら、はっきりした異状は読み取れない。次に重機で表面の土を薄くはがしていく。どうやら地下はサンゴの岩盤になっているようだった。

土を一メートルもはがさないうちに、予想していたとおり岩盤の一部にすき間が現れた。「おっ」と声上がる。ぼく自身が発したのかもしれない。縦長のトンネル状の空間に土が詰まっている状態だ。ここからは手作業となる。ぼくはツルハシを振るい始めた。たった土はショベルで掻き出す。

(この先はしだいに広がっていて、やがて縦横高さ二メートル規模の部屋が姿を現す!)
妄想でないことを信じよう。宝庫に入ったぼくが、中にあるものを目にして後ろを振り向き、こうつぶやくのだろう。

「すばらしいものがあります」

ぼくは、ハワード・カーターが、エジプトの王家の谷でツタンカーメンの宝物を発見したときのシーンを思い浮かべていた。砂に埋もれていた細い階段を降りていき、現れた分厚い扉の一部に穴を開け、ろうそくの明かりを差し込んだとき、後方に続くスポンサーのカーナヴォン卿が待ちきれずに尋ねる。

「何か見えるかね」

それにカーターが答える。

「はい、すばらしいものが」

カーター自身の手記にあるこの場面を何度読み返したことだろう。いま、ぼくは彼と同じステージにいる。そう思うと、心臓がバクバクした。

しかし――

土の詰まったすき間はしだいに細くなり、ついにはなくなってしまった。トンネルが奥

に続いている様子はない。血流が止まったような体をようやく二本の足で支え、しばらくたたずむ。長靴の中に冷たい汗が流れていく感触があった。そのときTVカメラがこちらを向いていたかどうか、気にもとめなかったが、どうやら映像は全国に流れていたらしい。時刻は午前十時ごろだったと思う。

「だめですか、ここは？」

ディレクターの問いかけにふと我に返り、返答した。

「入り口は別の場所のようですね」

気を取り直し、探索範囲を広げることを告げた。表面の土を重機ではがし、白い岩盤が出たところで手作業に転換。この繰り返しだ。そんな発掘作業の様子を、一時間おきに生中継した。武道館の徳光さんはじめ、有名タレントたちの期待が、モニターテレビを通じて伝わってくる。

途中から、この場所の発掘は宝島小中学校の先生と児童・生徒にバトンタッチした。校長先生を先頭に、六年生の湧太君、洸太君の双子の兄弟らが、元氣いっぱいシヨベルをふるった。そしてぼくは、もう一箇所のエキストラポイントを探ることにした。RockとPalmが起点ではなく終点になる可能性もあるかもしれないと、牧場内を動き回り、そこに該当する地点に金属探知機を当てていたとき、けたたましいビーブ音が鳴り響いたところだ。イメージしている宝庫の深さや形状とは結びつかないが、ここにも何かが埋まっているそうだった。

その場所は窪地になっていて、周りには大きな岩がゴロゴロ転がっていた。岩はじゃまなので重機を使ってどかし、まず地面をならす。準備が調ったところでもう一度探知機をかけてみると、やはり強い反応があった。そこで、深さ二十センチを目安に、重機で少しずつ土をはぎ取っていくことにした。二回、三回と、大きなバケットが注文通りに動く。

オペレーターは島の青年団の若手だ。

（もう何か見えてきてもよさそうなものだが）

そう思ってオペレーターに合図を送り、停止したバケットの下に潜り込み、シヨベルで土をならしてみた。不思議なことに、その下は自然層が続いているようだった。探知機をかけてみると、もう反応がない。そこで、無駄とは思いつつも、掘り出した土を広げて何かないか調べてみたが、これといった金属質のものはなかった。

一連の作業は中継されていて、とくに徳光さんが、金属反応がなくなった理由を知りたいがっているのがわかったので、ぼくは説明をするためにカメラに向かった。ところが、一回あたりの中継時間が十分という制限があるので、そこでCMタイムとなった。仕方ない、説明は一時間後だ。とりあえず、不思議がる出演者とスタッフにわけを話した。

「ここは窪地だから、雨が降ると水たまりができます。そのとき、土中の鉄分が水に溶け出して流れ込み、濃みます。それを繰り返しすることで、表土の鉄分濃度が高まるんです。きつとそれが反応したのでしょ」

これまでほかの場所で何度も経験したことだった。金属探知機は便利な道具ではあるものの、けっして万能ではない。そこに財宝が埋まっていれば、まちがいにきゅっするはずだが、実際には目的外のほかのものに反応してしまうことが多いのだ。

午後七時、十数回目になる最後の生中継の時間がやってきた。あかね色に染まる海をバックに、ぼくたちは発掘調査の終了を宣言した。悔しさしか残らなかった。番組を見てい

た人たちが、どれだけ本気になってくれたかはわからない。説明が十分ではなかったとしても、少しはワクワクしながら見守ってくれた人がいたかもしれないが、すぐに忘れてしまうことだろう。では、島の人たちや番組スタッフはどうか。みんな明日からやるべきことがある。気持ちを引き剥がさなければ支障が出るにちがいない。だから、「お疲れさまでした。楽しかったね」で幕を下ろすしかない。

ぼくも、周りに合わせて余韻を楽しみ、午後九時前、村の中心部にあるコミュニティセンターの前につくられたひな壇の片隅に座り、覚え立ての「サライ」を声の限りに歌ったが、（このまま終わるわけにはいかない）という気持ちがくすぶっていた。民宿に帰ってすぐに始まった、最後の夜を惜しむ酒盛りのときも、焼酎を飲みながらぼくはリベンジのことをずっと考え続けていた。

これまでの経験に照らし合わせると、よほどの幸運に恵まれない限り、たった一日だけの発掘で決着がつくはずがない。今回はたまたまテレビ番組の企画にのっただけで、トレジャーハンターとしては、魅力的な新しいターゲットに出会い、謎解きの第一歩を踏み出したばかりなのである。未解決の部分もある。「Death Valley」も見つけていないし、元禄十一年の出来事に関する記録も、自分の目で確認したわけではない。かつては島にあったという『譜幾利須人宝島侵掠記』は、文政七年に島にやってきたイギリス人のことを記録するために書かれたものだが、その中に、島に伝わる元禄十一年の事件のことが、ついでに記載されているのだという。文書はおそらく鹿児島本土の図書館あたりに収められているのだと思うが、まだ調べがついていない。

宝島はいまでも東京から遠いところにある。ヨーロッパやアメリカに行くよりも時間がかかる。だから、再調査の機会をつくるのはかなり難しい。目を閉じると、島にいないはずのない白くて大きな犬がつきまといってくる。激しく吠えかかるわけではないが、時折「オゾン」と意味ありげになく。その目に宿る妖しげな光に、ぼくは吸い寄せられていく。どうにも抗いようがない。